



情報誌

FAR

37 号

事務局：公益社団法人 日本放射線技術学会事務局内

〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入東鋸屋町 167 ビューフォート五条烏丸 3F

TEL:075-354-8989. FAX:075-352-2556/http://www.jsrt.or.jp. Email:office@jsrt.or.jp

《ごあいさつ》

唐津でお逢いしましょう!!

副会長 川上 壽昭



残暑お見舞い申し上げます。暦の上では立秋を過ぎたとはいえ、連日の猛暑にいささか参っておりますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。それにしても年毎に夏の暑さが身体に应えるようになってきました。夏になると、「何となくだるい」「食欲がない」「ぼんやりとする」などと感じる人は少なくないと思います。

夏バテは、特別な痛みや重大な症状が少ないことから、そのまま毎日を過ごしがちですが、高齢者にとって夏バテは非常に危険です。夏の暑さは体力を激しく消耗し、その上、食欲が低下するために栄養補給も滞ります。進行すれば、脱水症や熱中症になることも少なくありません。ご存じの通り、この夏も熱中症で倒れたニュースがよく聞かれますが、その8割が65歳以上の高齢者で、自宅の庭や畑での死亡例が目立っています。夏の暑さを軽く考えないで、しっかりと残暑を乗り切ってください。

さて、平成 25 年 10 月 17 日～19 日の会期で「Power to the people 地方の底力 ～安全と安心の技をみがく～」を大会テーマに第 41 回秋季学術大会が福岡市で開催されます。

本大会を主催されます橋田大会長の願いは「経済の低迷が長引き、そのうえ 2011 年の東日本大震災と、日本の元気が失われている気がします。放射線診療の分野でも、大きなトピックスが少なく活気がなくなっているようです。そこで、テーマに Power（活力）を付け、モチベーションアップをはかり、皆様や学会に大きな力が生まれることを願っています。この大会が、その契機になることを期待しています。更に、学術研究に国境はないと云われますが、現実には地域格差が存在します。ただし、地方ならではの特色、特長も持っています。秋季大会は 8 地方部会を回り、今回 8 年ぶりに九州で開催します。この機会に、活発な討論のもと、有用な情報を九州（福岡）の地から発信できればと思っています。と本大会に懸ける熱い抱負を述べられています。この期待に應えるべく一人でも多くの FAR 会員の参加をお願いします。

さらに、毎年の秋季大会で恒例となっております歴史とロマンを求めての名所・旧跡巡りは、富吉先生のお世話で佐賀唐津への旅が計画されております。佐賀唐津は、優雅かつ雄大な自然の神韻と、万葉の風・桃山文化の薫りを感じる歴史と浪漫に満ちたところと紹介されております。そして、FAR 会の一歩の楽しみであります懇親の宴は、玄界灘を一望できる高台に建つ「老舗旅館大望閣」で準備されております。最上階に併設された展望大浴場に浸かりながら、豊臣秀吉が朝鮮出兵時に軍船を停泊させた約 400 年前の名護屋港に夢を馳せ、夏の疲れを十分に癒した後、風呂上がりのビールと呼子名物のイカ料理をはじめ玄界灘の海の幸で大いに語りあいましょう。楽しみにしています。

内 容

- | | |
|-----------------------------|-----------|
| 1. ごあいさつ | 副会長 川上壽昭 |
| 2. 秋季学会へのお誘い | 大会長 橋田昌弘 |
| 3. 会員動向 | |
| 4. 会からのお知らせ | |
| 5. 特集「心に残る写真機（カメラ）」＝その 2＝ | |
| 1)「私の父はカメラ狂だった！」 | |
| 2)「ここに残る写真機（カメラ）」 | |
| 3)「私の思い出のカメラ・2 台」 | |
| 4)「私の愛するカメラ「アサヒペンタックス」 | |
| 6. 追悼文「砂屋敷忠先生を偲んで」自治医大 菊地 透 | |
| 7. JSRT 情報 | |
| 8. 連載《お国自慢》 | 名古屋市 藤田卓造 |
| 9. 編集後記 | |

~~~~~

## 《秋季学術大会へのお誘い》

### 歓迎のご挨拶

第41回秋季学術大会 大会長 橋田 昌弘



日頃より、ご指導、ご鞭撻を賜り感謝申し上げます。九州部会 橋田（熊本大学医学部附属病院）です。この度、第41回秋季学術大会長を拝命し、平成25年10月17日（木）～19日（土）の会期にてアクロス福岡（福岡市）で開催します。大会テーマを「Power to the people 地方の底力 ―安全と安心の技をみがく―」としました。放射線技術学は、学際領域の応用科学であり、医学、工学、物理学、保健学等の統合された科学と思います。そして、私たちの研究成果は、医療において応用され5年後、10年後、20年後・・・には世の中の役にたつと思っています。特に、目の前の患者様の診断・治療に発揮され、患者様の力（power）になると信じています。一方、日本経済の低迷が長引き、そのうえ2011年の東日本大震災と、日本の元気が失われている気がします。そこで、本大会のテーマとしてPower（活力）を付けモチベーションアップをはかり、皆様や学会に、より大きな力が生まれることを願っています。

本大会では、採用演題数461題（応募演題数473題）と多くの演題を応募頂きました。予想を大幅に超え、実行委員一同嬉しい悲鳴をあげております。また、実行委員会企画として、特別講演と2つのHold Your Handセミナーを企画しました。NHK野球解説者の与田 剛氏に「野球界のリーダー論 ～WBCの舞台裏～」と題しまして特別講演をお願いしています。与田氏は、現役時代は剛速球投手として活躍し、引退後は解説者やコーチとして活躍されており、プロ野球界の表も裏も知り尽くされています。日頃聞けない興味ある内容で、聞いている人をpower upさせてくれると期待しています。セミナーの1つ目は医療安全をテーマに、九州大学の鮎沢先生の「医療安全の今後の課題 ～“そして安全になったでしょうか”に答えるために～」と題した講演を企画し、大会のサブテーマである「安全と安心の技を磨く」に沿った内容にしました。2つ目は、英語力向上をテーマに、久留米大学のChartrand先生の「How to give effective presentations ―Essential techniques for delivery」と題したレクチャーを企画しました。学会として国際化を目指し、4月の第69回総会学術大会から英語の発表を増やす試みを始めました。この流れに沿って第41回秋季大会では、少しでも会員の英語発表のお手伝いをしたいとの思いで企画しています。

九州人の熱い思いで企画、運営にあたるつもりです。実行委員一同、皆様のご来場を心よりお待ちしております。今後とも、宜しくお願い申し上げます。

~~~~~

《会員動向》

- ・会員数（平成25年8月1日現在）：101名
 - ・新入会者（平成25年4月1日以降）：5名
熊谷孝三(4/1)、佐藤幸光(4/1)、平野浩志(4/1)、西谷源展(4/13)、橋本廣信(5/2)
 - ・死亡退会者（平成25年4月1日以降）：1名
砂屋敷 忠（平成25年4月15日逝去）
 - ・退会者：1名
酒井尚信（平成25年8月1日申し出により、平成25年3月31日付けで退会）
- ~~~~~

《会からのお知らせ》

- ・平成25年度「第2回運営委員会と第1回総務委員会との合同委員会」の開催
下記の日時に宿泊（一泊）しての合同委員会の開催予定（委員会報告は次号掲載予定）
開催日時：平成25年8月21日～22日
開催場所：熱海「金城館」

- 議 題：(1) 会務報告、(2) 情報誌関係、
(3) ①「2013 懇親の夕べ」会計報告 ②「2013 佐賀への旅」関係
③「2014 懇親の夕べ」関係、(4) その他

《JSRT 情報》

『第 41 回秋季学術大会』 大会テーマ：「Power to the people 地方の底力
～安全と安心の技をみがく～」

大会長：橋田 昌弘（熊本大学医学部附属病院）
会 期：平成 25 年 10 月 17 日（木）～19 日（土）
会 場：アクロス福岡

『第 70 回総会学術大会』 大会テーマ：「Face to Face Faces to Communities Face to the World」
一向きあう、つながる、そして広がるー

大会長：江口 陽一（山形大学医学部附属病院）
会 期：平成 26 年 4 月 10 日（木）～13 日（日）
会 場：パシフィコ横浜会議センター他

《特 集》「心に残る写真機（カメラ）」＝その 2＝

1) 私の父はカメラ狂だった！

池田市 金尾 啓右



私の父の趣味がレコード鑑賞とカメラ狂だった。

レコードはクラシックで、ベートーベン、モーツァルト、シューベルトなどの洋モノが 100 枚は下らなかった。犬がマイクに向かって吠えている登録商標？の、ビクターの蓄音機を購入して毎晩聞き入っていた。まだ戦前の昭和 15 年（1940）頃である。父の厳命で、当時 6～7 歳の私は、隣室の 3 畳間でせんべい布団にくるまったまま、毎晩息を殺して寝たものだ。それにも増して、カ

メラも凄かった。当時の最高級カメラは、ドイツのツアイス・イコン社の「コンタックス」であった。

ライカ版（24×36mm）で、高精度の連動距離計を備えていたようだ。調べてみると、シャッタースピードが 1/1250 秒まで改良されていたらしい。なるほど、私が何回も全力疾走させられた訳が分かった。勿論べらぼうに高価だったらしい。戦後すぐに売り払われてあえなく家族の食費になってしまった。この写真は、私が板橋の氷川神社境内で（当時の境内はすごく広かった）、カメラに向かって全力疾走して（させられて）いる一枚である。

こんな訳で、私は西洋音楽とカメラには、少なからぬ恨みがある。



2) 「心に残る写真機（カメラ）」

徳島市 八木 浩史



山田先生より標記のテーマでの寄稿依頼が参りました。私は中学生時代から写真撮影は好きで、大学時代にフィルムの現像、焼き付け、引き伸ばしを憶えました。徳島大学の放射線技師学校に奉職後は当時の教授もカメラが好きなのでいろいろ写真についての話をしたことを憶えています。教職現場では写真部の世話をするとともにワンゲルの面倒も見ていましたので山の写真（私は花の写真）を撮る機会が多くカメラとの縁は切れませんでした。

ただ、今回のテーマである「心に残る写真機（カメラ）」に沿った文章が書けるかと考えると不安です。私はいろいろなものに興味を持ってきました。カメラもその一つですが、単なる興味本位で。それらに対するこだわりとか深い思い入れとかいうものが全くといっていいほどありません。テーマにはそぐわないかもしれませんが、私が今まで手にしてきたカメラ達の話語らせていただこうと思いましたが、今は手元にはないカメラもあり手にした時期もあやふやで、どのようになるか不安なまま書き出しました。手元にはないカメラの写真はネットから無断で使います。また、手元にはないカメラは記憶に頼って探しましたので実際のものとは異なるかもしれません。

最初に記憶に残っているのは、今も手元に置いてある 1995 年 12 月（中学時代）発売のリコーフレックス（二眼レフ）です [写真 1]。このカメラは長年使用しましたので少しその仕様を記述します。なんと言ってもブローニー（120）6×6cm 判フィルムを使用していたので、今思えばきれいな写真が撮れました。二眼レフの定型となっていたカム繰り出しフォーカス（詳しいことは知りませんが、ドイツのローライコードによく似たヤシカフレックスと異なるという意味でしょうか）を脱却してヘリコイドを採用し、フォーカスレバーを左右に（写真の★印）突き出して操作性を向上したそうです。このカメラはフィルムを巻き上げなくてもシャッターが切れるので二重撮影が可能です、いま思えば馬鹿なことをやりました。均一な青空に向かってシャッターを切ってもフィルムには何も写らず、再度の撮影が可能だと考えて撮影を試みたことがあります。その結果は想像されるとおりでした。

次に手にしたカメラは 1960 年頃（大学時代）に発売されたコニカ S シリーズのどれかだと思いますが、記憶は定かではありません。水に落として使用不可になったことだけは憶えています。記憶をたどって [写真 2] をネットから転載します。いまは手放しましたが（いま思えば手元に置いておくべきでした）、次に手にしたカメラは東京オリンピック年の 1964 年（大学時代）に発売されたアサヒペンタックス SP です。このカメラとの付き合いは長く、就職後の山歩きまで続きました。ねじ式の交換レンズ機構と絞り込み測光が特徴でした。この [写真 3] もネットから転載します。一眼レフカメラとしては軽く（828 g）、シャッター音が小さかった記憶があります。



[写真 1]



[写真 2]



[写真 3]



[写真 4]



[写真 5]

アサヒペンタックスに特に不満があったわけでも、不具合が生じたわけでもありませんが、昔からカメラはニコンというイメージというか憧れがあったので、1972年に発売されたニコンF2を購入しました。このカメラを手にしたときの印象はずっしりとした重量感とガシャという、いかにも撮影しましたというシャッター音になぜか「あーあ、本物のカメラだ」と感激したことを憶えています[写真4]。

なお、[写真5]は1959年に発売されたニコンFです。元々は核医学検査装置に装着されていましたが、装置が廃棄されるときにカメラも不要と言うことで頂いたものです。

これ以後、私の使用機器はニコンとなりました。このニコンF2にモータドライブを付けて使い続けていましたが、1982年に発売されたリトルニコンと称されるニコンFG[写真6]、このカメラはオート測光と



[写真6]



[写真7]

いうのが気になって購入しましたが、フルオートで使用するると便利ではありますが、当然のことながら被写界深度などが適用できず、花を撮影するには不満があったため、絞り優先で使用していました。次にオートフォーカスに魅力を感じて1986年に発売されたニコンF-501AF[写真7]にマクロが使用できるズームレンズを付けて購入しました。これはなかなか使い勝手のよいカメラでしたが、レンズを回してピントを合わせる魅力も捨てがたくニコンFGと共用していました。

この間、一寸した興味からインスタントカメラを購入しましたがほとんど使用しませんでした。しかも使用者が少なく、珍しいから面白いと思ってコダックの製品を買ったのですが、このカメラは特許問題に触れて製造を中止し、製品は回収されました。[写真8]はネットから転載したものです。



[写真8]

そして、デジタルの時代と言うことで家族も使いやすいようにと富士フィルムのFinePixF601[写真9]を購入しましたが、妻はレンズ付きフィルム(使い捨てカメラ)を好み、私にとってはおもちゃのようなカメラだったのでほとんど使いませんでした。しかし、デジタルの流れに負けて退職間近にマクロが使用できるズームレンズ付きのニコンデジタル一眼レフD80を購入し、家族旅行などに持参しています。



寄る年波で山歩きなどはしなくなりましたが、近所には薬草園もありますので野山の花の写真を撮りたいと思っていますが、なかなか思うに任せないのが現状です。この他に一度も使用したことがないカメラを持っています。このカメラは一目惚れと言いましょか、気に入って「いいカメラですね」と言っていたもので、既述の教授が退職の時に「八木君、[写真9]早めの形見分けだよ」とおっしゃって、くださったカメラで1959年3月に発売されたキャノンP[写真10]です。この教授も数年前に逝去され、まさに形見となってしまいました。一度も使用したことはありませんが、このカメラこそが教授の思い出とともに私にとって心に残る写真機(カメラ)であるかもしれません。P型はポピュラーP(Populaire)という機種名です。広角35mmレンズ用の全視野内に50mmレンズ用と100mmレンズ用の視野枠をルミフィールド式で示す等倍型のパララックス自動補正式として簡略化してあります。つまり、焦点距離35mmの広角レンズから中望遠の100mmレンズまでが使用できるカメラです。

アナログ全盛の時代であるならば是非使いこなしたかった心に残る写真機（カメラ）です。

写真は 50 mm のレンズを付けた本体ボディと 100 mm（Asahi Kogaku Takumar f3.5）の交換レンズです。



[写真 10]

3) 私の思い出のカメラ・2 台

名古屋市 前越 久



私が初めてカメラを手にしたのは昭和 32～35 年頃であったと思う。20 才前半の頃であった。名大 X 線技師学校を卒業して名大病院に就職したのが昭和 32 年であるから、今から 55 年くらいも前になる。初年度の半年間は定員枠がなく無給であった。今年中には定員がつくからとの教務主任の勧めで残ったのである。履歴書が空白になるといけないということで名大病院に「見学生」という制度ができた。当時の技師長さんが気の毒がって、夏休みなどで技師が 1 週間くらい休暇をとる病院があると代務で行かせてくれた。初めて働いて手にしたお給金は 6500 円/週であったことを覚えている。半年間の無給の時を経て、10 月 1 日からコバルト 60 二重回転式放射線照射装置が設置されたことによる定員が 1 名ついたので、名大病院の正式職員になることができた。初任給は月給 7300 円であった。大卒の給料が 12000～13000 円ほどであったから、無給の時代の方が高給であった。

現在の CR が出現する前の X 線写真といえば、フジフィルムとかサクラフィルムやコダックのフィルムによるアナログ X 線写真の全盛の時代であった。そして、毎年フジフィルムとサクラフィルムではそれぞれの会社ごとに X 線写真のコンテストを行っていた。全国の診療放射線技師は単純写真や造影写真を撮影し、自慢の技術を競って応募していた。この時のサクラ X レイの一等の賞品としてコニカフレックスという 2 眼レフカメラが授与された時があった。当時の時価を元小西六の星合重男氏に問い合わせたところ、昭和 28 年発売のコニカフレックス I 型は 47,000 円、昭和 30 年発売のコニカフレックス II 型は 32,000 円であったとの事であった。この 2 眼レフはファインダーがカメラの上部にありカメラを上腹部あたりにかまえてファインダーを上からのぞき撮影したものである。ファインダーは 60mm 角くらいの大きさで見やすく、“弁当箱”との愛称で呼ばれ憧れのカメラであった。レンズは F3.5、フィルムは 60x60mm の 12 枚撮りであったように思う。私の当時の X 線写真撮影技術ではとても一等賞はとれないし、買おうとしても私の初任給程度では飲まず食わずにしても半年はかかる高額なカメラであった。そのカメラを名大病院の先輩が受賞し取得されたことがある。私が名大病院に就職して 1～2 年後の頃であった。羨ましくて何度も見せてもらったものである。しばらくして、その先輩があまりに私に関心を示すのを見かねてのことなのか、ある日「譲ってもいいよ」といつてくれた。「えっ!」とびっくりし、ただでは申し訳ないので交渉のすえ安くしてもらい手に入れることができた。当時としては人気の高い 2 眼レフカメラが自分の手元にある喜びを感じた瞬間である。これが私の 20 才代にしてカメラな



るものを手にした最初である。今思えば結構かさばるし重いカメラであったが旅行や日常生活でもよく愛用したものである。やがてこのX線写真コンテストも患者さんに余計な被曝を与えてはならないということで中止になった。

もう1台の思い出のカメラはフジフィルム社のデジカメである。私が平成11年3月末をもって名古屋大学を定年退職するときに同僚たちが記念品として贈ってくれたカメラである。カメラ名はFinePix2900Z(写真)、230万画素、3倍ズーム、メモリーカード32MB、本体400g、タテxヨコx厚さ=73mm x 128mm x 60mm というものであった。当時としては高性能のデジカメで、結構高額なカメラであった。まだあまりデジカメを持っている人も少ない時代であったように思う。撮影すれば即座に液晶モニター(30mm x 40mm)上で画像を見ることができし、パソコンにつなぎプリンターから写真は適当に加工してプリントアウトができるという代物であった。カラー写真が現像・定着操作も不要で自分でプリントできるということは画期的なことであった。自分自身がこんな素晴らしいデジカメを早い時期に体験できた一人であることに優越感さえ抱いていた。デジカメの出現により町のD P屋さんがだんだん消えてなくなり始めたのもこの頃だったのだろうか。このカメラはバッテリーがFUJIFILMのNP-80とかいう特殊なリチウム電池であったので現在では入手することができず、この愛用のカメラも骨董品になってしまった。

アナログカメラの時代はレンズのFナンバーの小さいものが明るいレンズとして自慢の要素であった。私が名大病院に就職したとき診療放射線技師の草分けの先生で細江謙三先生という有名な先生がおられた。京都医療科学大学の前身であるレントゲン技術専修学校に滝内政次郎先生というやはり有名な先生がおられたが同時代の先生である。細江先生はX線映画の研究者としても有名であった。暗室の中での蛍光板透視X線像(まだイメージインテンシファイアーなるものも無い時代なので)を三脚にセットした映写機で撮影するわけであるが、映写機のレンズのFナンバーが何と0.85と聞いていた。ドイツのツァイス社製の高性能の映写機だと自慢しておられたことを思い出している。

一方、現在のデジカメでは画素数の大きさが性能評価の一つの要素になっているようである。私が初めてデジカメを手にしてから僅か15年後の現在では、2~3万円の価額で、1,600~1,820万画素、20~24倍近いズーム機能を有するというすごい性能のデジカメが安く売られるようになった。液晶画面(or有機ELモニター)も大きくなり明るい屋外でも見やすく、メモリーカードも8~16GBに、動画や音声付の画像が得られるデジカメに発展した。こんなに性能がアップするとは当時ではとても想像することはできなかった。しかし、このようにデジカメの性能は大きく進歩したが、一方、使用する私自身は後期高齢者となり体力なる性能は逆にどんどん低下してしまった今日である。

4)私の愛するカメラ「アサヒペンタックス」

京都市 山田 勝彦



私が写真に興味をもち始めたのは、やはり放射線技師教育機関に入ったからだと思う。1954年(昭和29年)に京都の「レントゲン技術専修学校」に入学したが、教育科目に写真学があり、実習室には暗室とそこには引伸器や現像設備が完備していた。

最初買ったカメラは中古のジャバラ式カメラで、まずはジャバラを引き出し、距離計でピントを合わせるが、これではあまり良い写真は撮れなかった記憶がある。その後、二眼式レフレックスカメラ、オリンパスを買った。カメラは大きく重かったが、ファインダー画面の映像を見るのは結構楽しかった思い出がある。1960年代になって当時としてはまさに画期的な撮影レンズを通して測光するTTL方式の「一眼レフカ



メラ」が出現した。各社のカメラの中でも私の関心が最も高かったのは、「アサヒペンタックス SP」であった。これは1967年に発売され、当時の価格で5万円余りしたため、当時30才前半であった私の給料では到底買える品物ではなかった。でも一生懸命に貯金をして、ついに購入できたときの喜びは今も記憶に残る。

結構、どっしりとした重量感があり、ファインダーをのぞきながらシャッターを切ると一瞬画面が消え、「バシャー」という音とともに手元に響く快感はたまらない感動である。その後、広角レンズや望遠レンズを購入し、各種の追加部品も買い揃え、このカメラでは結構楽しむことができた。でもフィルムからデジタルへの移行に伴い、ついにこのカメラも使用不能となり、タンスの中で永久の眠りに入ることとなった。・・・残念至極である。私はこのようにカメラは大好きであるが、写真撮影は実に不得手で良い写真は殆ど残っていない。しかしこのカメラだけは永々と本棚の隅で眠っていたが、実は今年1月に転宅することとなり、家の中の大整理をしている中でこのカメラを見つけた。考えれば約30年ほど眠っていたことになるが、大整理の必要性に迫られ大分に迷ったあげく、ついに整理する決心をした。捨てる直前にシャッターを切ってみたが、期待したとおりの「バシャー」という音と感触を感じ、残念ながらついにお別れをすることとなった。

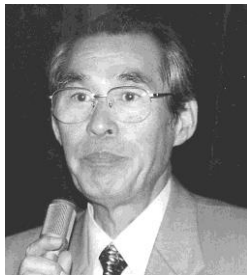
今はもっぱら簡単なデジタルカメラで旅行などの写真を撮っているが、もう一度重いことを辛抱して、アサヒペンタックスを思い出しながら、キャノンかニコンの大型カメラを買おうかと迷っているところである。

~~~~~

## 《追悼文》

### 「砂屋敷 忠 先生を偲んで」

自治医科大学 菊地 透



永年功労会員の砂屋敷 忠 先生が、2013年4月14日に享年79歳で永眠しましたので、ここに謹んでご冥福をお祈りします。

砂屋敷先生は、1935年に広島市郊外で子ども時代を過ごし、広島原爆の惨禍の状況は当時10歳のこども心にも強く焼き付けられたと言っていました。その後、放射線に興味が生まれ1954年、大阪大学診療エックス線技師学校に入学しました。入学年の3月にビギン環礁での水爆実験に伴う第5福竜丸の惨事もあり、卒業後は放射線を人類の福祉・平和に役立たせる分野で働きたいと、学生時代から放射線影響、放射線防護・管理にも高い関心があったと伺いました。そのため卒業後は、国立公衆衛生院、広島大学原爆放射能医学研究所の研究機関の仕事を行い、診療放射線技師としては同大学医学部附属病院、歯学部附属病院に勤務しました。60歳の定年退職後は5年間、広島県立保健福祉短期大学放射線技術学科に助教授として赴任し、診療放射線技師教育に尽力しました。その後は医療分野以外の放射線教育にも尽力しました。

砂屋敷先生とは、医療における放射線防護・安全管理の活動を通じて、日本放射線技術学会にも恒常的な放射線防護の活動組織が必要と、1990年に放射線防護委員会を設置して委員長、1995年に放射線防護分科会を設立し初代防護分科学会会長として尽力しました。その他にも組織検討委員長、放射性同位元素検査技術委員長、放射線治療技術委員長、理事など本学会の学術・研究分野の発展に精力的に尽力し、本学会の学術活動の道を築いて来ました。広島県保健福祉短期大学の勤務時代に、海に見える三原の場所で瀬戸内の鮮魚と広島のお酒を頂き、医療の放射線診療技術は、尽きるところ医療人の倫理・モラルであり、そのためには教育が大切と、放射線の倫理教育を熱く語ったことを今でも思い出します。わが国の放射線診療技術の普及に尽力し、医療の放射線を含め放射線が人類の福祉に役立つことを信じて、最後まで優しく人一倍の心配りで私たちに接して頂きました。今は、天国であの優しい笑顔で私たちを末永く見守って頂けると想い、亡き友に杯を傾けます。 合掌

~~~~~


《連 載》

『お国自慢』 島根県・人物考

名古屋市 藤田 卓造



森 克彦先生より、『お国自慢』について記事の依頼がありましたが、当初はどうしようか考えましたが、締め切りが8月との事、つい引き受けてしまいました。私は名古屋大学医学部附属診療エックス線技師学校卒業ですから、愛知県についてと思いましたが、前越久先生が26、27号で名古屋の紹介が既に掲載されています。はたと困惑し何か良い思案は無いかな？そこで、私は伊勢湾台風の翌年昭和35年、島根県立浜田高等学校を卒業後、上記、名古屋大学医学部附属診療エックス線技師学校に入学した次第ですから我が郷里『島根県』についてと思ったら、既に川上壽昭先生が24、25号で出雲大社について詳細に記載されておられます。

伊勢神宮と並び、古代の荘厳な独特の建築様式を保つ出雲大社で平成25年5月10日夜、60年に一度の大遷宮のクライマックス本殿遷座祭が迎えられたと新聞報道がされた。それに第29回日本診療放射線技師会学術大会が島根県松江市で開催されます。9月には、私も丁度この会場で50年永年勤続の表彰を受ける予定になっておりますので『島根県』に決めました。けれども名所旧跡については他にゆずり、副題の島根県に関係ある人物について私の乏しい知識で考えてみることにしました。

最初に中学時代の歴史で総理大臣がいたと教えられた『若槻禮次郎』である。

【若槻禮次郎】1866～1949 松江藩（現松江市雑賀町）下級武士奥村仙三郎、クラの次男として誕生、幼名は源之丞、号は克堂、爵位は男爵、帝国大学法科大学（現・東京大学）卒、大蔵官僚から貴族院議員、立憲同志会、憲政会、立憲民政党に属し、大蔵大臣（18、20代）、内務大臣（41、42代）、内閣総理大臣（25、28代）拓務大臣（4代）等を歴任した。

近代では『竹下登』

【竹下登】1924～2000 飯石郡掛合村（現・雲南市）に生まれる。早稲田大学卒、掛合中学校教員から島根県会議員を経て衆議院議員14期務め、内閣官房長官（35、38代）、建設大臣（38代）、大蔵大臣（84、86、87、90代）、自由民主党幹事長、自由民主党総裁（12代）等を歴任した。自由民主党の最大派閥であった『経世会』の創設者、総理大臣としてはふるさと創生1億円、消費税の導入等を行った。しかしながら、リクルート事件で総辞職したので、田中角栄が新潟県にもたらしたような地域開発を島根県にもたらす前に終わってしまった。こうしてみると、お隣の山口県には明治以降多数の総理大臣がおり島根県とは大変な差が付いているようです。

さて、明瞭に覚えておりませんが、小学校の時、益田市へ遠足だったと思いますがみすばらしい神社へ行き『人麻呂神社』だと言われた。その当時、無知な為、何も思いませんでした。

【柿本人麻呂】 別に島根県の出身ではありませんが誰もが御存じの飛鳥時代の万葉歌人、三十六歌仙の一人。しかし、古文を習っていませんので、百人一首ぐらいしか思い出せません。人麻呂以後子孫が石見国美乃郡司として土着、鎌倉時代以後益田氏を称して石見国人となったとされる。柿本人麻呂終焉の地として島根県益田市高津柿本神社がひっそりと存在する。

次に、子供の時ラジオだと思いますが『耳なし芳一』など怖い思いをした『怪談』を著した小泉八雲

【小泉八雲】1850～1904 パトリック・ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn）ギリシャ出身のイギリス人新聞記者で島根県立中学校への赴任、松江藩士の娘小泉節子と結婚して日本国籍を取得、松江市に在住 代表作に前出の『怪談』がある。旧居は松江観光の一部になっています。

次に、中学時代、古銭や郵便切手を収集しておりましたので、文化人切手の中に『西周』（にし あまね）が島根県津和野町出身とありました。

【西周】1829～1897 石見国津和野藩の御典医の家柄、父・西時義（旧名・森覚馬）江戸時代後期から明治時代初期の幕臣、官僚、啓蒙思想家、教育者。貴族院議員。勲一等瑞宝章。文久2年（1862）幕命で津田真道・榎本武揚らとオランダへ留学、帰国後、目付に就任、徳川慶喜の側近として活動する。明治3年には

明治新政府に出仕、以後兵部省・文部省・宮内省などの官僚を歴任。明治6年には森有礼・福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・西村茂樹・津田真道らと共に『明六社』を結成。
続いて、西周の親戚筋にあたる『森 鷗外』は、だれもが御存じ。

【森 鷗外】1862～1922 明治・大正期の小説家、評論家、翻訳家。劇作家、陸軍軍医（軍医総監）、官僚、医学博士・文学博士、本名は森林太郎、石見国・津和野（現・島根県津和野町）出身。津和野藩主、亀井家の御典医を務める森家、廃藩置県等を契機に父と東京へ移住。現・東京大学医学部卒業。
第一次世界大戦以降、夏目漱石と並ぶ文豪と称される。陸軍軍医になり、陸軍省派遣留学生としてドイツへ、ベルリンでは、北里柴三郎とともにロベルト・コッホに会いに行っており、細菌学の入門講座をへて、コッホの衛生試験所に入った。1889年（明治22年）読売新聞で文筆活動を開始、文筆活動については、他に譲ります。

1899年 軍医監（少将相当）、1902年 第1師団軍医部長、1904年 日露戦争に第2軍軍医部長として出征、1907年 陸軍軍医総監（中将相当）、陸軍省医務局長（人事権をもつ軍医のトップ）に就任
1922年 腎萎縮、肺結核の為に死去。満60歳没、『余ハ石見人 森林太郎トシテ死セント欲ス』の遺言により墓には一切の荣誉と称号を排して『森林太郎ノ墓』とのみ刻された。向島弘福寺に埋葬され、関東大震災後、東京都三鷹市の禅林寺と島根県津和野町の永明寺に改葬された。
1908年 陸軍省医務局長に就任した直後から、臨時脚気病調査会の創設に動いた。現在、脚気は **Vitamin B1 (チアミン)** の欠乏によって起こる疾患と判明しております。ここに話題提供します。

【忙中閑話】 この本、発刊当時、愛知県心身障害者コロニーの医師により著作された。
『闘う医魂 小説・北里柴三郎』文藝春秋社（写真）によれば、北里が所長を務めていた伝染病研究所の東大移管問題を、医学界の勢力争い、愛憎など人間臭いドラマとして描かれております。
当時 帝大医科大学長、青山胤通（たねみち）と北里柴三郎の闘いになるのですが、森林太郎は当然、帝大側の立場になります。

北里は政友会の原敬、医学界の長老、長与専斎、長谷川泰、後藤新平、等有力者を後ろ盾に、全国医師会の総帥に推挙された。一方 青山は、天皇の侍医を拝命し、総理大臣大隈重信の主治医をつとめ、帝大の医科大学長として全国の医大に君臨していた。明治18年4月 帝大の緒方正規教授が『脚気は【脚気菌】なる病原菌によっておこる』という新説を官報に発表した。陸軍省の森林太郎も帝大の立場側に居たと思われる。そのため、麦飯より白米飯が継続されたと思われます。興味ある方はご一読を **!!!**

次に、NHK ラジオ放送の名作の時間、朗読は『徳川夢声』当時、録音機材も無いので、どのように表現したら良いかも不明ですが印象に残った声と語り口調、後年、森繁久弥さんの方が印象に残っておりますが

【徳川夢声】1894～1971 日本の弁士、ラジオ、テレビ番組等多方面で活動した。日本の元祖マルチタレント言える人物である。島根県益田市に生まれ、東京に育つ。本名、福原 駿雄（としお）、日本放送芸能家協会（現・日本俳優連合）初代理事長。

テレビなんでも鑑定団、中島誠之助さんの範疇、陶芸の『河井寛次郎』です。

【河井寛次郎】 1890～1966 島根県安来町（現・安来市）、大工の家に生まれ、松江中学（現・島根県立松江北高等学校）を経て1910年東京高等工業学校（現・東京工業大学）入学、板谷波山の指導を受け卒業後、京都市陶磁器試験場に入所、濱田庄司と共に1万種以上の釉薬の研究や中国陶磁の模倣や研究を行った。私は陶芸に詳しくないのでこれで切ります。

次に、女性ファッションデザイナーとして有名な『森英恵』、私は余り衣服に興味ないので判りませんが、
【森 英恵】 1926～ 島根県鹿足郡六日市町（現・吉賀町）出身、東京女子大学卒業後、1948年学生時代に知り合った元・日本陸軍主計少佐・森賢と結婚。夫の家業・繊維会社で働きながら洋裁学校『ドレスメーカー女学院』通い、1951年新宿東口に洋裁店『ひよしや』を開いた。この頃、日本映画の衣装を数多く手掛けた。1965年ニューヨークコレクションに初参加、蝶をモチーフにした女性的でエレガントなドレスが受けマダム・バタフライと呼ばれてファッション界の話題になった。1977年にはファッション業界において権威的で、非常に閉鎖的であったフランス・オートクチュール協会から、アジア人として初めて会員として認められた。ハナエモリ（Hanae Mori Co., Ltd）は、1951年設立したオートクチュールメーカーで

あるが2002年に約100億円の負債を抱えて倒産。

次に、『ふしぎなえ』として、面白い構成図、例えば、ある高さから落ちた水が流れ回ってまた最初の地点に戻る。実際にはあり得ない画面が構成されている絵の作家『安野光雅』がいる。

【安野光雅】 1926～ 島根県鹿足郡津和野町の出身、1940年山口県立宇部工業学校入学、1944年繰り上げ卒業、住友鉱山忠限鉱業所（飯塚市）へ、1945年応召、復員後、徳山市で小学校の教員、山口師範学校（現・山口大学教育学部）研究科を修了、1949年美術教員として上京。三鷹市、武蔵野市の小学校で教師を務める傍ら玉川学園出版部で本の装幀やらイラスト等を手掛けた。35歳の時教師を辞し、絵描きとして自立。1968年『ふしぎなえ』はフランス、エッシャーの作品に影響を受け、不可能図形の不思議な世界を描き評判となった。

私ども放射線技師にとって忘れてならない人物が『永井 隆』であろう。

【永井 隆】1908～1951 医学博士、『長崎の鐘』の著書がある。

1908年（明治41年）島根県松江市にて医師であった父・寛と母・ツネの長男として誕生、父の医院開業の為、飯石郡飯石村（現・雲南市三刀屋町）に移り幼少青年期を過ごす。1928年（昭和3年）旧制島根県立松江中学校を経て長崎医科大学（現・長崎大学医学部）に入学、1932年、大学卒業後、放射線医学教室の助手となり、1945年8月原子爆弾投下、長崎医大の診察室で被曝、重傷を負うも、救護活動に従事、1946年1月長崎医科大学教授就任、1951年5月、白血球数39万を超え、43歳で死去。

私の出身地、島根県浜田市の関連で、中学、高校の校舎は、旧浜田歩兵21連隊舎が使用されました。

そして、銅像が有ったかどうかは不明ですが、『木口小平』の名前

【木口小平】 1872～1894 日清戦争で戦死した日本陸軍兵士『シンデモ ラッパヲ クチカラハナシマセンデシタ』ラッパ手として修身の教科書に掲載された訳ですが、死後硬直が原因とされています。

浜田市内のお菓子屋に利休饅頭は現在も有りますが、抱月饅頭も有ったと思うのが『島村抱月』

【島村抱月】1871～1918 日本の文芸評論家、演出家、劇作家、小説家、詩人、新劇運動の先駆けの一人として知られる。 島根県小国村（現・浜田市）に佐々山一平の長男として生まれ、浜田町裁判所検事・島村文耕の養子となる。1894年東京専門学校（現・早稲田大学）卒業後 読売新聞社会部主任、イギリス、ドイツ留学後、早稲田大学文学部教授、1906年、坪内逍遙と文芸協会設立、本格的に新劇運動を始める。1913年看板女優の松井須磨子との不倫が醜聞となり、松井と劇団・芸術座を結成、翌年トルストイの小説を基に島村が脚色した『復活』の舞台が評判となり、松井が歌う劇中歌『カチューシャの唄』がレコードにも吹き込まれ、新劇の大衆化に貢献した。1918年島村はスペイン風で急死、松井は抱月の後を追って自殺する。2004年、遺骨が島根県金城町（現・浜田市）に里帰りした。

高校の時、選択科目で美術だと『橋本明治』がいたと聞かされた。

【橋本明治】1904～1991 日本画家、日本芸術院会員、文化勲章受章者

島根県那賀郡浜田町（現・浜田市）生まれ、1931年東京美術学校日本画科卒、松岡映丘に師事。1937年新文展で特選。1940～1950年法隆寺金堂壁画模写に従事。1951年芸術選奨文部大臣賞受賞。1952年日展審査員。1955年日本芸術院賞受賞。日展評議員、日展理事、日本芸術院会員、日展常務理事等を経て1974年文化勲章受章。 私自身が絵画に興味を持っていなかったなのでこの程度で終わります。

次に、我が母校、旧制浜田中学は、明治13年7月、設立され120年目を迎えるが余りなじみがありませんので現在の島根県立浜田高等学校出身者について検討します。私は**浜田高校11期**です。

経済人では『坂根正弘』 **浜田高校10期**生、在京浜高同窓会（東京）の会長を務める。

【坂根正弘】1941～ 広島市に生まれ、1945年原爆投下の2ヶ月前浜田市へ疎開、浜田高校を経て、1963年大阪市立大学工学部卒業、ブルドーザー設計技師として小松製作所入社、1989年専務取締役、1999年代表取締役副社長を経て、同社代表取締役社長兼CEO就任。コマツ創立以来初の赤字800億円計上の厳しい時期に就任、構造改革の断行により、2003年3月期330億の営業黒字を達成。中国、東南アジア、インド、アフリカ、等新興国にグローバル展開を進め、2007年度は1700億円の経常利益を計上、2009年3月期には、売上高2兆円、世界2位の建設機械メーカーに導く。日本経済団体連合会（経団連）評議員会副議長、日本ロシア経済委員会副委員長、日中経済協会副会長、2010年5月 経団連副会長の要職を務める。

次に、スポーツ界では『梨田昌孝』**浜田高校 23 期**はNHK 野球の解説者として登場するので皆さんご存じのことと思います

【**梨田昌孝**】 1953～ 本名、梨田昌崇、プロ野球選手（捕手）、プロ野球監督、野球評論家
浜田高校 3 年の春・夏に甲子園に連続出場、残念ながら 1 回戦で敗退、1971 年、近鉄バッファローズ入団
捕手としてレギュラー、独特のバッティングフォームで活躍、2004 年近鉄球団は消滅、最後の選手・監督
両方で優勝を経験した唯一の人物である。2008～2011 年 北海道日本ハムファイターズの監督を務め、現
在は、前出のNHK 野球の解説者、日刊スポーツ野球評論家とし活躍。続いて数名の野球選手。

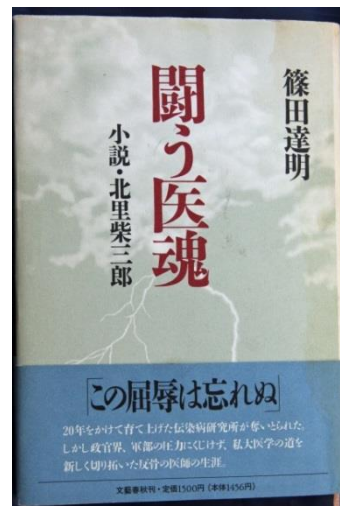
【**新宅洋志**】 1943～ **浜田高校 13 期** 駒澤大学進学、1966 年中日ドラゴンズ入団、しかし捕手としての
ポテンシャルは優れるも木俣達彦が正捕手として君臨し、打力で劣り出場の機会は少なかった。

【**和田 毅**】 1981～ **浜田高校 50 期**、野球を始めたのが愛知県江南市立藤里小学校の時、その後、父の
郷里島根県出雲市へ転居、1997 年浜田高校エースとして夏の甲子園へ、残念ながら一回戦敗退、しかし、
翌年帝京高校に勝利してベスト 8 へ進出したが古木克明を擁する豊田大谷高校に延長で敗退。早稲田大学卒
業後、福岡ダイエーホークス入団、2003 年阪神との日本シリーズ 3 勝 3 敗後第 7 戦目新人で完投、日本一
の胴上げ投手となった。2004 年アテネオリンピック選出され銅メダル、2011 年メジャーリーグ ボルチモ
アオリオールズ入団、2012 年左肘痛発症故障者リスト入り。浜田地方は野球が盛んで、他にも

【**佐々岡真司**】 1967～ 浜田高校の商業科が分離、島根県立浜田商業高校を卒業後、NTT 中国野球部へ
三菱重工広島の前補強選手として都市対抗へ、広島東洋カープに入団、スライダーを武器として活躍した投手。

【**三沢 淳**】 1952～ 私の出身中学、浜田市立第一中学校から江津工
業高校に進み 1970 年春・夏、甲子園に出場、新日鐵広畑を経て中日ドラゴ
ンズへ入団、アンダースローからシュートが武器で、打たせてとるのが持
ち味で 1973～1975 年 3 年連続の 2 桁勝利を挙げる等主力投手として活躍。
1985 年、日本ハムファイターズに移籍、翌年引退する。1996 年、第 41 回
衆議院議員総選挙に新進党公認、愛知県 4 区から衆議院議員に立候補、当
選したが 1 期で後は 3 度落選した。

他にも 【**芦田伸介**】や【**渡哲也**】【**渡瀬恒彦**】兄弟等の俳優人も居ました。
何のまとまりの無い書き方ですが、無理に思い出し、こじつけて書きました
が、皆様に読んで貰えるのか自信は有りません。インターネットフリー
百科事典（Wikipedia）や岩波書店電子辞書『広辞苑 第六版』付属検索ソ
フト「こととい Light」を利用したので興味ある方はインターネットを
ご利用ください。



《編集後記》

8 月 7 日は暦上では立秋でした。いやー、その後の暑いこと、熱いこと。体温を上まわる気温、本当につ
らいですね。四国の四万十市では 41℃を記録しました。
日本一暑い地になりましたね。この情報誌 37 号をお届け
する頃にはこの暑さが収まっていることを願っています。
特集は前号に引き続き「こころに残る写真機（カメラ）」
としました。執筆者の写真機（カメラ）に対する想いが心
に響いてきます。砂屋敷先生の追悼文を急なお願いにもか
かわらずお引き受け下さった菊地先生に御礼を申し上げます。ありがとうございました。では会員の皆様、秋季大
会時における「2013 佐賀への旅」でお目にかかりましょ
う。

石井 勉

FAR 情報誌 No.37（非売品）

発 行 日 平成 25 年 9 月 15 日
発 行 者 山田勝彦
編集委員会 森 克彦（委員長）
石井 勉 橋本廣信
山田和美
森：連絡先 Tel&Fax. 049-225-2619
Email:mokamokawh@gmail.com